



No.15 / October, 2010

さつきの丘だより

竹村内科・腎クリニック通信

〒322-0029 栃木県鹿沼市西茂呂 4-46-3

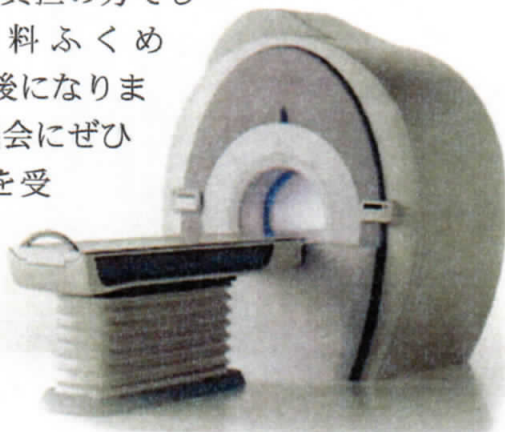
透析センター編

Phone; 0289-60-7577 · Fax; 0289-60-7578 · URL: <http://take2002.on.arena.ne.jp>

● 最新MRI装置導入

MRIはX線を使わずに、磁力を使って体の中を見る装置です。当院で導入した東芝製の最新型MRI装置は、超伝導1.5テスラという鹿沼市内の医療機関では最高レベルの性能です。また、特許を持つ静音化技術により、世界一の静けさを実現して、高い診断能はもちろん、患者さんへのやさしさも追求しています。MRIは、放射線による被曝が無く、脳血管をはじめ脊髄・骨・関節・前立腺など、いままでCTでは十分に検査できなかった部位でも鮮明に診断できます。検査前の注意としては、MRI装置からは24時間いつでも大きな磁場が発生しています。スタッフが誘導するまで入室はすることは出来ません。また安全のためにも、身につけている金属製のものは装置に引き付けられ事故につながる恐れがあるため、検査前に取り外します。特に、ペースメーカーをつけた方はMRI検査は出来ません。また、補聴器など故障の恐れがありますので、MR検査室内には持ち込むことができません。検査費用ですが、健康保険適応で、1割負担の方でし

たら診断料ふくめ
1900円前後になります。
この機会にぜひ
MRI検査を受
けてみて
はどうで
しょう？
(グッチ)



■ インフルエンザ接種

昨年冬の「新型インフルエンザ」の流行(パンデミック)には、世界中がパニックになりました。メキシコから始まって、患者さんの死亡率が高かったことから、日本でも 심각한警戒態勢とワクチンの生産が急がれました。はじめはワクチンの数が不十分で、医療関係者や妊婦さんが優先されました。マスクも品薄が続きました。ようやくワクチンが行き渡った頃には流行そのものが沈静化して、若干「拍子抜け」した記憶があります。騒ぎすぎだった面もありましたが、それでも日本ではおそらく数百万人が感染したようです。しかし全体の死亡率は0.1%前後だったようで、海外に比べて格段に低くなっています。日本人ははじめに手洗い・マスクをして、早めに十分な抗ウイルス薬を使用したことが効果があったようです。今年のインフルエンザワクチンは、新型インフルエンザも含んでいますから、従来の季節性インフルエンザも含めて1回で予防効果があります。10月から受付をはじめました。インフルエンザのワクチンは普通のかぜに効果はありません。しかし、健康な成人のインフルエンザに対する予防効果は70~90%と高く、また、ワクチン接種は高齢者の死亡の危険を約80%減らすなど、重症化を防止する効果もあります。65才以上の高齢者や基礎疾患のある方には、肺炎球菌ワクチンもあわせておすすめています(健康保険適応なし)。どうぞお問い合わせ下さい。 **ウラも見てね**



学会だより

9月11日に、とちぎ健康の森（宇都宮市駒生）で、第33回栃木県透析医学会が行われました。県内から多数の透析医療関係者が参加しました。当院からは、「両下腿切断断端壊死のため寝たきり生活をしいられた患者と家族スタッフの奮闘～洗浄による創処置の効果を追う（山川由香梨）」、「シャント手術所見を活かしたシャントの管理と指導（福田幸男）」、「カプラ洗浄間隔の

検討（大瀧陽二）」、「透析中の頭痛で発見され3日間の保存的経過観察のみで急速に消退した急性硬膜下血腫の一例（根本修）」、「維持透析症例のRLSおよび全身掻痒感に対するプラミペキソールの効果（根本遵）」の5演題を発表し、盛んな討論を行いました。1施設で5つの演題発表というのは、他にありません。このほか、0リングテストで薬剤の投与量を決定する研究や、血流コイルから「気」が発生するメカニズムの検討など、ユニークな発表も多数あって、会場は大いに盛り上がりました。



とつき書評

宮城谷昌光

「花の歲月」 講談社文庫

今年の夏は、宮城谷昌光の中国歴史小説にはまってしまった。「子産」「重耳」「管仲」「天空の舟」「晏子」「太公望」などの長編小説を次から次へと読みふけた。久しぶりに集中した読書体験だった。中国古代の戦乱の世を舞台にした大長編小説がこの著者の代表作とされているが、今回紹介するのは、権力のない女性や弱い立場のものが主人公になる、著者異色の中編小説だ。1時間ほどで読めてしまう200ページ弱の文字の大きな本なので、宮城谷昌光が初めてという人にもぜひおすすめしたい。司馬遷の「史記」から題材をとった、漢王朝時代の美しい物語である。貧しい名家竇（とう）家の娘が村の長老に推されて、王室に女官として入ることに決まった。時の皇帝の母・呂太后が過酷に君臨する宮廷で、心優しく澄んだ瞳を持つ猗房（いぼう）の生活が始まる。一方、猗房の6才下の幼い弟広国（こうこく）は、さらわれて奴隷として売られ、苦難の人生を歩いていく。この姉弟の数奇な

運命の変転が、静謐で格調高い文体で描かれている。読み終えたときには、心が温かく満ちてくるのを感じた。作中で、猗房は父親から老子の教えを受けて育ったというので興味を持ち、おまけで「老子」（金谷治訳注・講談社学術文庫）まで読むことになった。私は「老子」を初めて読んだのだが、人間の思い上がりを戒め、自然に従って生きることを諭す古代の哲学に深い印象を受けた。孔子が強者（権力者）の哲学だとしたら、老子は弱者（貧者）の思想ということなのだろう。今の中国政府の高官にも読んでほしいものだ。次は加島祥造の「タオ-老子」（ちくま文庫）を読んでみようと思う。（ね）

